様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１７１０４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２８５７

研究課題名（和文）大学小説ことはじめ―感傷主義と19世紀のアメリカ男性作家たち

研究課題名（英文）The Birth of the College Novel: Sentimentalism and male authors of the 19th Century

研究代表者
大野　瀬津子（Ohno, Setsuko）

九州工業大学・教養教育院・准教授

研究者番号：５０３８０７２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：もともと本研究は、19世紀初頭から中葉にかけての「大学小説」(college novel）をアメリカ感傷主義の文脈から解き明かすことを目的としていた。しかし感傷小説の研究史を紐解いてみると、同分野の最近の研究がパイオニアたちの持っていた切迫感を失っていること、そして新たな研究領域を立ち上げる際には、現実社会の問題を当事者として引き受け、現実の変革を目指す意志が欠かせないことが分かった。よって、21世紀日本で切迫性をもつ「大学とは何か」、という問いに応答する形での大学小説研究の立ち上げへと方針転換した。最終年度に、19世紀前半の諸作品が大学の有用性の議論にどのように応答しているかを考察した。

研究成果の概要（英文）：I originally intended to elucidate the birth of the “college novel” in the context of American sentimentalism in the nineteenth century. Examining the research area of sentimental novels, however, I realized that recent scholars lost the sense of urgency that scholars of the 1980s had, and that it is necessary for us to have a will to change society, when opening up a new field of research. Therefore, I went on to embark on the study of college novels in response to the urgent issue we are facing today: what is the meaning of higher education? I discussed how a few novels written in the first half of the nineteenth century reacted to the contemporary discussion of the usefulness of higher education.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：大学小説　感傷小説研究史　19世紀アメリカ社会　大学

1.　研究開始当初の背景

アメリカの大学を舞台とした小説群は、しばしば「大学小説」(college novel) として一括される。大衆小説の一ジャンルとしての大学小説が人気を博し始めるのは、南北戦争期のことだった。しかしその起源は、1828 年に出版されたナサニエル・ホーソーンの『ファンショー』にまで遡る。以後 1840 年代から 1850 年代にかけても、大学生を主人公とする小説は間歇的に公刊されていた。

従来の文化研究は、20 世紀初頭の学生文化を説明する際の補足資料として大学小説を扱うことはあったが、19 世紀の作品については興味を示してこなかった。他方文学研究は、このジャンル自体を研究対象とみなしてこなかった。数少ない先行研究の一つにジョン・E・クラマーの『アメリカ大学小説――注釈つきビブリオグラフィー』(2004) があるが、これは書誌であり、作品分析はされていない。本研究に着手した時点で、19 世紀初頭から中葉に出版された大学小説の先行研究はほとんど無かったといえる。

南北戦争期までの大学小説は、感傷小説・家庭小説と呼ばれるジャンルの作品群と類似しているように思われる。主として女性作家がものした感傷小説・家庭小説は、女性を主人公とし、センチメンタルな要素をふんだんに織り交ぜ、結婚で幕を下ろす傾向が強い。これに対し、同時期の大学小説は、男性作家によって書かれ、男子大学生の学生生活を描く作品群であったが、感傷小説と同じくセンチメンタルな要素に溢れ、基本的に結婚をもってハッピー・エンドとなる。私は、揺籃期の大学小説が感傷小説・家庭小説とネガとポジのような関係にあったのではないか、という仮説を立てた。

2.　研究の目的

感傷小説の先行研究は、19 世紀アメリカ文化・文学の支配的モードだった感傷主義の文脈から、女性作家の作品を数多く発掘してきた。しかしメアリー・チャップマンとグレン・ヘンドラーの『センチメンタルな男たち―アメリカ文化における男性性と情動の政治』(1999) が指摘するように、感傷主義はもともとヨーロッパの男性作家たちをルーツとする。アメリカでも 19 世紀中葉までは、男性作家が感傷主義の形成に積極的に関わっていたという。そこで本研究では、男性作家の手になる胎動期の大学小説を、感傷主義との関わりから紐解いていくことを目的とした。

3.　研究の方法

資料調査、考察、学術イベントへの参加、関連分野の文献の渉猟を中心に本研究を進めてきた。

(1)資料調査

平成 27 年度はホーソーンの出身大学であるボードゥン大学の図書館で、大学のカタログ、学生の手紙、卒業式でのスピーチ原稿などの写しを入手した。これらの資料は、特に『ファンショー』が書かれた当時のボードゥン大学について理解を深める手助けとなった。平成 28 年度はアメリカ古書協会にて、大学小説の初版本や同時期の大学生の日記のコピーなどを手に入れた。これらは、各作品を考察する上で大いに役立っている。

(2) 考察

本研究の目的を達成するため、以下のような要領で考察を進めた。平成 27 年度は、感傷小説研究史全体の流れを整理した。この考察を通し、同研究分野が「キャノンから女性が排除されていた」という前提を共有していること、そしてこの前提を問い直す必要があることを明らかにした。

この結果を受け平成 28 年度は、「キャノンからの女性の排除」という感傷小説研究の前提の見直しに取り組んだ。まずこの前提の根拠とされてきた 1980 年代の二本の論文――ポール・ラウターとニーナ・ベイムによるもの――を考察対象とし、それらが上記の前提を実証していない点を指摘しつつも、男性中心主義的な現実を変えようと志している点を高く評価した。同時に、後の研究者たちが二人のもっていた切迫性を失っている点を批判した。感傷小説研究の前提について再考するさらなる試みとして、「キャノンから女性を排除した」張本人とされるＦ・0・マシーセンの『アメリカン・ルネサンス』の精読を通じ、後の感傷小説研究者たちが女性作家に認めることになる共感という価値を、既にマシーセンが文学評価の基準としていたことを論証した。28 年度の研究を通して、新たな研究領域を開拓する際には、現実社会の問題を当事者として引き受け、現実の変革を目指す意志が欠かせない、という知見を得た。

この知見は、本研究の方向性に修正を迫るものとなった。もともと本研究は、感傷主義の文脈から黎明期の大学小説の作品群を読み解くことを目的としていた。そして実際、本研究の遂行過程で、感傷主義が 19 世紀アメリカ文化・文学の支配的モードであったこと、フェミニズム批評の登場以前から、『アメリカン・ルネサンス』のように、アメリカ文学を共感やセンチメンタリズムと結びつけて評価する文学研究が存在していたことが確認できた。しかし、19 世紀の大学小説に感傷主義の影響を読み込むだけでは不十分である。なぜなら、大学を舞台とする小説には、感傷小説・家庭小説とのプロット上の類似点は認められるものの、大学をめぐる論争や大衆のイメージ、大学の理念形を作中に折り込んでいる点において、両者は袂を分かつからだ。加えて、現実社会の問題を当事者として引き受ける切迫性が必要だ、という先の洞察に照らせば、まさしく現代の大学に関わる切迫性に応えなければならない、というこ

とになる。翻って私自身が当事者である日本の大学は、研究・教育機関としての自律性を失いつつあり、危機的状況に陥っている。大学とは何か、という問いこそ、21 世紀の日本で切迫性をもつのではないか。こう考えた私は、感傷小説研究の系譜に連なるのではなく、大学とは何か、という喫緊の課題に応答する形で大学小説研究を仕切り直すことに決めた。

この方針変更に沿って、平成 29 年度は小説の背景に注目して、小説分析に入った。まず『ファンショー』(1828)を、大学人と庶民からなる大学共同体成立の物語として考察した。次にハリー・ヘイゼルの『ボストンの美女――あるいはケンブリッジのライバル学生たち』(1844)、チャールズ・ベイリーの『矯正された学生――ある大学生活の物語』(1844)の二作品を取り上げ、前者が大学のレトリック教育の有用性を認める一方、後者が内省に不向きな集団主義の場として大学を批判している、と論じた。平成 30 年度は、これら口頭発表での考察をさらに発展させて、論文にする予定である。

(3)学術イベントへの参加

本研究と関連する学会や研究会には積極的に参加し、19 世紀アメリカ文学の動向についてアンテナを張り巡らせるとともに、他の研究者との交流を図った。平成 27 年度は、日本ナサニエル・ホーソーン協会第 34 回全国大会、日本ナサニエル・ホーソーン協会第 59 回・第 60 回九州支部研究会およびシンポジウムに参加した。平成 28 年度は日本ナサニエル・ホーソーン協会第 64 回九州支部研究会では 19 世紀作家に関する研究発表の司会を務めた。また平成 29 年度は、日本シェリング協会大会シンポジウム「シェリングの時代の大学論と現代」、東アジア学会第 74 回研究会シンポジウム、大学改革に関するシンポジウム「自由・競争・参加――大学改革からの問題提起」等、大学研究・大学論関連の学術イベントに出席し、大学研究ならびに日本の大学改革の現状の把握に努めた。

(4)関連分野の文献の渉猟

本研究に直接関わる文献はいうまでもなく、スコットランド啓蒙主義や現代の大学論・大学研究など、間接的に関連する文献も幅広く渉猟した。これらは、19 世紀アメリカの大学がどんな思想に影響を受けていたのか、また現在の日本の大学で何が起こっているのかを考える素地となった。

４．研究成果

平成 27 年度に行った感傷小説研究史についての論文は、『*Kanazawa English Studies*』に掲載された。同論文は、九州工業大学の機関リポジトリを通じて公表されている。さらにこの考察を基盤とする研究成果を、様々な研究分野の専門家と一般市民がともに考える場である文芸共和国の会で口頭発表した。このときフロアから出された意見は、本研究を進める上で大いに参考となった。レジュメと概要は文芸共和国の会の HP で公開している。

平成 28 年度には、ラウターとベイムの論文の分析を九州アメリカ文学会で口頭発表した後、論文を『中・四国アメリカ研究』に投稿した。同論文は、中・四国アメリカ学会の HP で公開されている。またマシーセンの『アメリカン・ルネサンス』の考察は、日本ナサニエル・ホーソーン研究会九州支部研究会で口頭発表し、論文は『中・四国アメリカ文学研究』に掲載された。中・四国アメリカ文学会の HP で公開される予定になっている。

平成 29 年度は、日本アメリカ文学会全国大会で『ファンショー』についての考察を、金沢大学英文学会総会では『ボストンの美女』と『矯正された学生』の分析を、それぞれ口頭発表した。

なお本研究の成果の一部は、平成 29 年 8 月 29 日に九州工業大学で行われた教員免許状更新講習でも扱い、社会に還元した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

① 大野 瀬津子「共感するマシーセン――感傷小説研究における『アメリカン・ルネサンス』批判再考――」『中・四国アメリカ文学研究』第 53 号 中・四国アメリカ文学会 (2017)　1-11 頁、査読有

② 大野 瀬津子「キャノンとは何か？――ポール・ラウターとニーナ・ベイムによる 1980 年代の論文のレトリックを考察する――」『中・四国アメリカ研究』第 8 号 中・四国アメリカ学会 (2017) 157-70 頁、査読有
http://home.hiroshima-u.ac.jp/csame/activity/fulltext-pdf/fulltext-08.pdf

③ 大野 瀬津子「感傷小説研究史とジェンダー――Jane Tompkins の *Sensational Designs* を中心に――」『*Kanazawa English Studies*』第 29 号　金沢大学英文学会 (2016) 1-14 頁、査読無
file:///C:/Users/Setsuko%20Ohno/Downloads/KES29_1%20(3).pdf

〔学会発表〕（計　5 件）

① 大野 瀬津子「19 世紀中葉のアメリカ大衆小説における大学と法律」2017 年度金沢大学英文学会総会 講演（2017 年 12 月 2 日）金沢大学（石川県金沢市）

② 大野 瀬津子「大学は役に立つのか――Nathaniel Hawthorne の *Fanshawe* における学知と世間知」日本アメリカ文学会第 56 回全国大会（2017 年 10 月 14 日）鹿児

島大学郡元キャンパス（鹿児島県鹿児島市）

③ 大野 瀬津子「共感するマシーセン――感傷小説研究における『アメリカン・ルネサンス』批判再考――」日本ナサニエル・ホーソーン協会第63回九州支部研究会(2016年6月25日)北九州市立大学北方キャンパス（福岡県北九州市）

④ 大野 瀬津子「「女性の排除」というレトリック――“Melodrama of Beset Manhood”と“Race and Gender in the Shaping of the American Canon”におけるキャノンと女性――」九州アメリカ文学会第62回大会（2016年5月7日)九州大学伊都キャンパス（福岡県福岡市）

⑤ 大野 瀬津子「《女子力》のアメリカ文学：感傷小説史とジェンダー」第1回文芸共和国の会　(2016年2月27日)九州工業大学戸畑キャンパス（福岡県北九州市）
http://republicofletters.hatenadiary.jp/entry/2016/03/07/192436

〔図書〕（計　0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大野 瀬津子（OHNO SETSUKO）
九州工業大学・教養教育院・准教授
研究者番号：50380720

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)